広報
# かみす
Kamisu public relations
2026年
3/1
No.453

神栖ディスカバリー File 33

特集

# 仏像修復師

「地域の宝を未来へつなぐ」

木の香りが漂う工房で、約3メートルの仁王像が静かに修復されています。
市内に拠点を構え、全国の文化財を守る仏像修復師を紹介します。

Pick up

2026年度以降実施を見直す事業 …… P6
2026年度神栖市奨学生の追加募集 …… P7
有料広告募集中！ …… P7

KAMISU CITY 20th ANNIVERSARY 神栖市 市制施行20周年

市公式LINEはコチラ

AR 広報かみすが動き出す
【COCOAR】アプリをダウンロードし表紙にスマートフォンをかざしてください。詳しくは10ページ
【COCOAR】

神栖ディスカバリー File 33

特集

# 仏像修復師

## 「地域の宝を未来へつなぐ」

私たちが目にする古い仏像の多くは、何度か修復の手を加えられながら、今日まで大切に伝えられてきました。その仕事を専門におこなうのが仏像修復師です。今回は神栖市内の工房を訪ね、仏像修復への思いや技術に迫ります。

## 仏像への興味が一生の仕事に

伊谷勇哉さん、青野真澄さん夫妻(※)が市内に工房を開いたのは約5年前のことです。仏像修復師は国内にわずか100人ほどしかおらず、あまり馴染みのない遠い存在と感じつつ訪問しましたが、仏像修復師となったいきさつを尋ねると、興味深いエピソードが次から次へと繰り出され、すぐに2人の話に引き込まれました。

伊谷さんは奈良県出身。父親が仏師で修復もしていたため、幼い頃からその仕事を間近に見てきたそうです。「お絵描きといえば仏像を描くし、戦隊ヒーローは全然知らないのに仏像の名前だけは詳しいような子どもでした。小学生になると父のもとで簡単な手伝いをしたこともあります。ですから高校卒業後は、迷わず東京藝術大学(藝大)で文化財修復を学ぼうと、心に決めていました」

青野さんは日本大学芸術学部で彫刻を学び、仏像に関心を持ったのは大学3年のときです。伊谷さんの影響を受け、古美術研究旅行に参加。興福寺国宝館の金子啓明館長の授業を受けたことや、室生寺(むろうじ)の菩薩像と出会ったことが転機となりました。「学んだことを社会で実践したいと思い、藝大大学院1年の時に会社(一般社団法人仏像修復舎)を設立し、修了と同時に2人で茨城のお寺を回って営業活動を始めました。初めて仕事をくださったのが行方市にある常光院(じょうこういん)のご住職さんです。それをきっかけに、途切れることなく修復依頼をいただけるようになりました」

藝大大学院で研究を続ける予定だった伊谷さんを説得したこと、工房用に購入した香取市の物件を断念したことなど、紆余曲折(うよ)の末に、青野さんの実家にある倉庫を改装して2人の仕事がスタートしました。

## 互いの得意分野を生かして

実は2人とも修復だけでなく、仏像制作も手がけています。「仏像制作は、彫る技術や造形に関する理解が深まるため、修復をする上でも非常に勉強になります」と青野さん。

欠損した部分を制作する伊谷さん

続けて伊谷さんが、「修復は、仏像によって状態がまるで違い、使用する材料や各時代の仏像の特徴などを学ぶ必要があるため、複合的な知識が求められます」と話します。青野さんは平安時代の仏像、伊谷さんは鎌倉時代の仏像に詳しいとのこと。それぞれ興味も得意分野も異なるため、2人で役割分担をしながら作業を進められるのが強みだと言います。

修復の技術は時代とともに進化しており、年2回開催されている文化財保存修復学会でも、新しい修復技法や材料の研究発表、新たな試みが20年後30年後の維持にどう役立っているかの検証報告などがおこなわれているそうです。2人は常に情報を更新しながら、より良い修復を追求しています。

## 大切にしている三原則

仏像というのは文化財の中でも少

仏像を修復する工房。中央には2体の仁王像

大きさに圧倒される仁王像の手

仁王像は足の指先まで力強い

仏像の後ろで光を表す「光背(こうはい)」を修復する青野さん

※民法上は夫妻同一氏ですが、仕事上それぞれの氏を名乗っています

## 仏像修復の主な流れ

**1.**仏像の形態を手がかりに慎重に解体　**2.**劣化を防ぐため、木に専用の素材を注入して材質を強化。さらに虫食い穴に充填剤を注入
**3.**破損や欠損した部分を制作　**4.**仏像を組み上げる　**5.**修復した部分が周囲と馴染むよう彩色

し特別な存在です。お寺に代々伝わるものは信仰の対象であり、古美術商では美術品として扱われます。そのため依頼主によって修復の方向性は異なりますが、その中でも揺るがない文化財修復の三原則があると教えてくれました。

「一つ目が当初部優先で、造立当初の部分を保護すること。二つ目が尊容の回復で、現状維持にとらわれず破損や欠損した部分を補足すること。三つ目が可逆性で、修復した部分をのちに以前の状態に戻せるようにすること。この三つを大切にしています。また、私たちの仕事は修復して終わりではなく、その内容を後世に伝える役割も重要です。そのため、お預かりしたときの状態から、各工程の作業や使った材料など、すべて記録を残しています。それが後世に修復をする際の貴重な手がかりとなります」

初仕事となった常光院・不動明王立像の「修理報告書」を見せてもらうと、損傷状態や修復内容が写真や図を含めて非常に緻密に記録されていました。台座の裏の銘記が明治期の補修で塗りつぶされたことや、後補（後世の補修）による光背の造形や色が適切ではないことも判明。修復後は見違えるような姿となっています。

### 修復の工程を見学！

次に工房を見学しながら主な修復工程について聞きました。工房の中央に横たえられているのは、鎌倉時代に制作された総高約3メートルの巨大な仁王像です。新潟県のお寺から搬入する作業も自分たちでおこないました。解体は伊谷さんが最も気を遣う作業です。「簡単に外れないこともありますし、表面が彩色で覆われていると、どの方向へどの順番で外せばよいか分かりません。仏像の形状などから手がかりを探り、彩色を傷つけないよう慎重に解体します」。その後、脆（もろ）くなった木に注射器でメチルセルロースを注入して材質を強化する〝含浸（がんしん）〟という作業や、虫食い穴に充填（じゅうてん）剤を注入する作業をおこないます。さらに、歴史知識と彫刻技術を駆使して欠損した部分を補作。元どおりに組み上げて、最後に修復した箇所が周囲と馴染むように古色（古く見せる

見違えるような姿となった
常光院「不動明王立像」

彩色)などを施して仕上げます。

もう一つ、作業台の上には金や青で彩色された光背が置かれています。これは古河市にある寺の秘仏の一部。12年に一度のご開帳に向けて応急修理をしているところで、クリーニングや剥落止めは青野さんが得意とする作業です。「彩色の塗膜が剥がれた下に膠水(膠を水で薄めたもの)を注入し、上から熱ゴテで押さえます。この熱ゴテは修復するものの形状に合わせて、真鍮を叩いて自作したものです」。後から補足したという部分を間近で見ても、どこに手を加えたのか分からないくらい、きれいに馴染んでいました。

## 世間の注目を浴びた新発見

仏像修復の難しさは、解体してみなければ分からないことが多い点です。表面はきれいでも、塗膜を剥がすと虫食いだらけで木材がスポンジ状になっていることも珍しくないそうです。一方、解体したことによって新発見につながる面白さもあります。仏像の胎内に納められた古文書も、できる限り自分たちで読み解くのだそうです。

中でも、岐阜県・川崎山薬師寺の観世音菩薩像の修復では、世間の注目を集める発見がありました。「江戸時代の制作と伝わっていましたが、搬入した仏像を見て〝平安時代の制作かもしれない〟と思い、後補の塗膜をすべて剥がしたところ、やはり直感どおりだったことが判明しました。1本の木を削りだす一木造りの技法は、平安時代の仏像の特徴です。江戸時代の補足が平安時代の造形と合っていなかったので、当初のお姿に近くなるよう修復しました」と振り返る青野さん。

この発見は新聞記事となり、各務原市は観世音菩薩像を市重要文化財に指定。それを記念し『修復で目覚めた平安後期の仏像 聖観音菩薩立像』と題して同市で特別公開され、伊谷さんが記念講演をおこないました。

## 地域の宝を守り続けるために

仏像修復のやりがいを、2人は次のように話します。「お寺で一番大切にしているものを、会ったばかりの私たちを信じて託してくださる。その勇気に応えなければと思い、数百年という歴史の重みを感じながら作業をしています。仏像をお預りするときには緊張感あふれる面持ちだったご住職さんも、修復が完了して仏像を出迎えるときには、すっかり表情がなごんでいて、〝あなたたちに預けてよかった〟と言っていただけるのは本当にありがたいですね。お寺で魂入れに立ち会う瞬間は、とても感激します」

今後の目標について、「修復した仏像が、観光につながったり地元への愛着を喚起したりして、社会に役立つことを願っています。もう一つは、文化財の指定解除になって朽ちていくだけの廃寺がある現実を知ってもらい、一人でも多くの方に文化財を守ろうという意識を持っていただけるよう活動していきます」と語ってくれました。

4月からは、初めて神栖市内にあるお寺の仏像修復を手がけることが決まっています。「私たちの仕事は、古くからあったものを、ずっと先まで残せるようにすること。実際に残していくのは、その仏像を大切に思うお寺や地域の人たちです」という2人。皆さんがこれから仏像に出会うとき、2人の仏像に込めた心に思いを馳せることで、新たな感動を刻む体験となることでしょう。

熱ゴテを使って「光背」を修復

仏像に合わせて色を調合

仏像制作も手がける

伊谷さん青野さん夫妻と子どもたち

平安時代の作と判明した
川崎山薬師寺「観世音菩薩像」